

会長要望演題

会長要望演題2 (II-YB02)

カテーテルによる新たな診断方法

座長:増谷 聡(埼玉医科大学総合医療センター 小児循環器部門)

座長:松井 彦郎(東京大学医学部 小児科)

Fri. Jun 28, 2019 9:30 AM - 10:20 AM 第4会場 (中ホールA)

[II-YB02-04]門脈体循環シャントに対するカテーテル診断および治療の役割

○土井 悠司¹, 金 成海¹, 石垣 瑞彦¹, 佐藤 慶介¹, 芳本 潤¹, 満下 紀恵¹, 新居 正基¹, 田中 靖彦¹, 矢本 真也², 漆原 直人²
(1.静岡県立こども病院 循環器科, 2.静岡県立こども病院 小児外科)

Keywords:門脈体循環シャント, カテーテル, 画像診断

【背景】先天性門脈体循環シャント (Congenital Portosystemic Shunt : CPSS) は長期的には肺高血圧症、肝性脳症などの重篤な合併症を来しうる疾患である。CTやエコーで門脈欠損が疑われ、肝移植対象と考えられていた症例でもカテーテル検査による肝内門脈の同定から治療に至る症例もあり、その診断治療におけるカテーテルの役割は増している。【目的と方法】CPSSの診断治療におけるカテーテルの治療戦略を検討すべく当院でカテーテルを行った CPSS症例の背景、治療内容を後方視的に検討した。【対象と方法】対象は2004年以降に当院で行った CPSS症例へのカテーテル延べ13件 (9症例、うち1例は Hybrid)。発見契機はガスリー検査、肺動静脈瘻、偶発的が各々1例、肝機能障害や高アンモニア血症などの採血異常が5例であった。カテ時の年齢は6.6歳 (0.5~11.8歳) で PSSの中でも静脈管開存は4例であり、2例は塞栓術施行、残り2例は介入待ちあるいは経過観察中となっている。PDV以外の5例ではバルーン閉塞のみでは肝内門脈の同定に至らず、カテ先の wedge造影にて肝内門脈を同定し shunt手術に至ったのは2例 (22%)、Occlusion balloon使用により複数ある CPSSの経路同定に至ったのは1例 (11%) で、この症例は近々カテーテルによる塞栓術を予定している。カテ先の wedge造影、Occlusion balloonの併用を用いても肝内門脈の同定に至らなかった2例のうち、1例は開腹 Hybridで肝内門脈の同定に至り、段階的治療となっている。もう1例は開腹 Hybridでの介入待ちとなっている。【考察】CPSSの診断治療にあたり、カテ先での wedge造影と occlusion balloonの併用は非常に有用であると考えられる。肝内門脈が極めて低形成な症例では開腹下に Hybridでカテーテルを行うことにより門脈の同定および治療に至り、肝移植が回避出来る症例が多く存在する。